

ポスター | 看護情報システム

## ポスター5 看護情報システム

2019年11月23日(土) 10:00 ~ 11:00 ポスター会場2 (国際展示場 展示ホール8)

### [3-P2-2-05] 退院時看護要約の RPA化に向けた 地域包括ケアシステム内における情報共有に関する研究 訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームに焦点を当てて

○岡部 春香<sup>1,2</sup>、中島 美津子<sup>2</sup> (1. 東海大学医学部看護学科, 2. 東京医療保健大学大学院)

キーワード : Nursing Discharge Summary, community comprehensive care system, Information Sharing

【目的】訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームの退院時看護要約の記載状況を明らかにすることである。

【方法】対象は首都圏の訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームから移動した患者・利用者のために記載された退院時看護要約である。調査対象期間は2017年4月～2019年3月であり、移動・退所状況を調査し、さらに除外条件を除き、主な疾患や移動先に偏りのない各ステーション・施設10部、計30部を抽出した。データ収集方法は既存の複数の退院時看護要約等を参考に独自の調査用紙を作成し記載した。調査項目は、年齢、性別、移動先、経過、感染症、アレルギー、ADL（日常生活動作）、継続看護等であった。分析は単純集計、項目ごとの記載率を出した。倫理的配慮として、研究者の所属機関の倫理委員会の承認を得た。退院時看護要約からデータを収集する際は個人を特定できる情報を除き、対応表を作成して、対象のプライバシー厳守に配慮した。

【結果】移動先は訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームともに病院が多く、訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホーム間の移動は少なかった。移動は訪問看護ステーションが多かった。退院時看護要約の文字数や記載率共に経過や継続看護が顕著に高かった。文章欄の内容や量は個々によって差があった。感染症、アレルギーは差がなかった。ADLについては文章欄によるものとチェック欄のものがあり、経過や継続看護と重複した内容が記載されているものもあった。

【考察】重複記録は、情報共有をする上で重要となるものを精査して明確にすることが示唆された。そして、必要なものが確実にわかりやすく記載されるような仕組みを作ることが喫緊の課題である。将来的には退院時看護要約の作成指針を示し、RPA（ロボスティックプロセスオートメーション）化を目指したい。

## 退院時看護要約の RPA 化に向けた 地域包括ケアシステムに伴う情報共有に関する研究

- 訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームに焦点を当てて -

岡部 春香<sup>\*1\*</sup>、中島 美津子<sup>\*2</sup>

\*1 東海大学医学部看護学科、\*2 東京医療保健大学大学院看護学研究科看護学専攻

### Study on Information Sharing in Community Comprehensive Care System for the RPA of Nursing Discharge Summary - Focusing on visiting nursing stations, geriatric health service facilities and special elderly nursing homes -

Haruka Okabe<sup>\*1\*</sup>, Mitsuko Nakashima<sup>\*2</sup>

\*1 School Of Medicine, Faculty of Nursing, Tokai University

\*2 Department of Nursing, Postgraduate School of Nursing, Postgraduate School, Tokyo Health Care University

#### Abstract

The purpose of this study is to clarify the state of the description of the nursing discharge summaries at visiting nursing stations, geriatric health service facilities and special elderly nursing homes that are used for information sharing within the community comprehensive care system. The subjects were the summaries of nursing at discharge for patients who were discharged from an acute care hospital, and the survey period was April 2017 to March 2019, and 30 out of 577 copies were extracted. Survey items included hospitalizations, ADLs, and continuous nursing cares. In the analysis, a simple tabulation was performed for each item, and the description rate was obtained. For the text data, the number of characters and the frequency of questions were measured. By item, the number of letters and the rate of writing were significantly higher during hospitalization and continuous nursing. There were differences in the processes of hospitalizations and continuing nursing cares. ADLs were also written in the hospitalization and continuous nursing sections. In the processes of hospitalizations, there were many descriptions of medical contents such as disease names, drug names, and treatment courses. There was no difference even when compared with a survey of chronic hospitals conducted in previous studies. In the future, it would be necessary to investigate the characteristics of the facilities outside the hospital in the same way and clarify the characteristics.

**Keywords:** Nursing Discharge Summary, community comprehensive care system, information sharing

## 1. 結論

世界に類をみない速さで長寿化の一途を辿っている日本では、病院で急性期を脱しないまま、自宅や施設などに移動せざるを得ない状況にある。2018 年度の診療報酬・介護報酬・障害福祉サービス等報酬のトリプル改定においても、団塊の世代が 75 歳を迎える 2025 年問題を見据え、地域包括ケアシステムの構築をさらに推進すべく質の高い在宅医療や訪問看護の確保に注力している。そのような医療の需給のアンバランス回避のため、患者は状態や状況に応じてこれまで以上に療養環境を移動することになる。

他の医療機関や在宅診療・訪問看護に移動した場合、それぞれの施設の看護職間で最初に得る情報源の一つに病院・施設間でやりとりをする退院時看護要約がある。病院内外において看護職が情報を共有する記録物として使用されるものであり、看護職によって入院・入所中の経過及び今後の方針等について記載されたものである。その退院時看護要約は、業務の合間を縫って作成している。貴重なケアの時間を割いて作成した記録が移動先の看護師により十分に活用されていない実態がある。先行研究によると、その理由として医師の説明に対する患者・家族の受け止めや退院・転院後の患者の生活を想定した内容、看護上継続されるケアや問題点にまで踏み込んでいない等の指摘がされている<sup>1)2)3)4)</sup>。そこで本研究では地域包括ケアシステムにおける情報共有手

段の一つである退院時看護要約に着目し、現状を把握したうえで、今後の労働人口減少や地域医療の需要拡大に向けた活用される方策を探索している。

## 2. 目的

地域包括ケアシステムに伴う情報共有を行う際に使用している訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームで記載された退院時看護要約の記載内容を分析し、課題を明確にすることにより活用される内容と作成効率の向上(RPA化)に資する基礎的試料を得ることを目的とする。

## 3. 方法

### 3.1 調査対象

調査対象は記録物で、首都圏の訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームから移動した患者・利用者のために記載された 2017 年 4 月～2019 年 3 月内の過去 2 年分の退院時看護要約である。選出方法は、首都圏の病院と移動歴のある医療機関・施設に依頼し、同意が得られたところとした。

### 3.2 調査期間

2019 年 1 月～2019 年 3 月

### 3.3 調査方法

1) 退院時看護要約の選定方法

過去2年間において移動・退所状況、退院時看護要約の有無を調査し、訪問看護ステーション、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム内で疾患や移動先に偏りのない退院時看護要約各10部、計30部を抽出した。除外条件は、入院前と同じ病院や施設への移動、実際に移動先に送っていない可能性のあるものとした。

#### 2) データ収集方法

既存の複数の退院時看護要約を参考に基本項目を網羅した調査用紙を自作し収集した。項目は年齢、性別、現病・既往歴、経過、感染症、ADL(日常生活動作)等とした。

#### 3) 分析方法

分析は項目毎の単純集計、記載率を検出、テキストデータは内容分析(文章内の文字の数や頻出度抽出)とした。

#### 4) 病院の退院時看護要約との比較

複数の病院で調査した先行研究と比較し、記載の類似性および相違性を比較検討した。

#### 5) 倫理的配慮

本研究協力は自由意思であり、研究者は守秘義務を厳守し、所属施設と協力施設の倫理審査委員会の承認を得て調査した。データは個人を特定できる情報を除き、組み合わせによって特定できる可能性があるものは対応表を作成しコーディング、ナンバリングにて試料化しプライバシーに配慮した。

## 4. 結果

### 4.1 背景

#### 1) 訪問看護ステーション

訪問看護ステーションでは訪問看護ステーションの利用を終了した人数・訪問看護ステーションから他への移動者数は245名であり、記載された退院時看護要約数は94件であった。退院時看護要約94件の移動先内訳は、訪問看護ステーションから病院間への移動が84件、訪問看護ステーション間の移動が4件、訪問看護ステーションからグループホームへの移動が2件、訪問看護ステーションからサービス付き高齢者向け住宅への移動が2件、訪問看護ステーションから特別養護老人ホームへの移動が1件、訪問看護ステーションからケアハウスへの移動が1件であった。

#### 2) 介護老人保健施設

介護老人保健施設では介護老人保健施設を退所した人数・介護老人保健施設から他への移動者数は155名であり、記載された退院時看護要約数は155件であった。退院時看護要約155件の移動先内訳は、介護老人保健施設から病院への入院が114件、介護老人保健施設から特別養護老人ホームへの移動が26件、介護老人保健施設間の移動が5件、介護老人保健施設からサービス付き高齢者向け住宅への移動が1件、介護老人保健施設から自宅への退所が7件であった。死亡退所が2件で、いずれも施設内の死亡であった。

#### 3) 特別養護老人ホーム

特別養護老人ホームでは特別養護老人ホームを退所した人数・特別養護老人ホームから他への移動者数は328名であり、記載された退院時看護要約数は328件であった。退院時看護要約328件の移動先内訳は、特別養護老人ホームから病院への入院が177件、特別養護老人ホーム間の移動が1件、特別養護老人ホームから自宅への退所が1件であった。また、死亡退所が148件で、施設内の死亡は110件、入院後の死亡は38件であった。

### 4.2 項目別による文字数や記載率

退院時看護要約の文字数や記載率共に、「経過」の部分が顕著に高かった。ADLはばらつきがあった。

### 4.3 退院時看護要約の記載内容

文章欄の量は個人差があった。感染症、アレルギーはチェックのみで文章表現とチェックとの重複記載はなかった。ADLについては文章表現とチェックにより、経過や継続看護との重複した内容が散見された。経過には疾患名や薬品名、治療経過等、医学的内容から看護に関する内容、IADLまで多岐にわたっており、特にADLは重複記載が目立った。

### 4.4 病院の退院時看護要約との比較

退院時看護要約の記載内容に違いは認められなかった。

## 5. 考察

訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホームともに移動先としては病院が7割以上と多く、訪問看護ステーションや介護老人保健施設、特別養護老人ホーム間の移動は1割弱、多くても介護老人保健施設から特別養護老人ホームで2割弱と少なく、いずれも病院とのやり取りが大半を占めていた。訪問看護ステーションや施設から移動する場所の種類は、訪問看護ステーションから他への移動が6種類と多く、他機関とのやり取りが多いことが明らかになった。

退院時看護要約は項目毎に漏れなく記載されているが、経過の内容についてばらつきや重複があり、効率化の検討が必要であることが明らかになった。重複記録は、情報共有をする上で重要となることを鑑みた結果であると推測されるため、必要なものが確実にわかりやすく記載されるような仕組みづくりが喫緊の課題である。RPA化に向けて作成支援が可能な項目や情報を整理し、文章は必要最小限に留めるような指針としてまとめる必要がある。更に看護職や記載対象である患者に着目し、退院時看護要約の記載・活用状況、看護職には受け手としてニーズに即しているか、患者には退院時看護要約に対する認知度や要望を明らかにすることで患者も看護職も双方向で活用できると考える。これらの効率化は看護業務負担の軽減にも繋がると考える。

## 6. 結論

- ・退院時看護要約の項目別による文字数や記載率は、「経過」の部分が顕著に高かった。
- ・退院時看護要約の記載内容はADLについて文章表現とチェックによるものがあり、重複した内容が散見された。

## 7. 文献

- 1) 斉藤広美他(2011):退院調整における病院と訪問看護ステーションの連携に関する課題 訪問看護ステーションへの質問紙調査から,北海道社会保険病院紀要,10, pp.57-61.
- 2) 斉藤広美他(2010):当院における病院と在宅を結ぶ継続看護の現状と課題 訪問看護ステーション所長へのインタビュー調査から,北海道社会保険病院紀要,9, pp.56-58.
- 3) 松本弘子他(2010):股関節疾患における看護サマリの実態調査,Hip Joint,36,pp.4-6.
- 4) 佐藤麻子他(2003):当院・老人保健施設間の継続看護の充実に向けた看護要約の検討(第1報),日本看護学会論文集:地域看護,33,pp.42-44.

## 8. 謝辞

本研究でご協力いただきました訪問看護ステーション、老人保健施設、特別養護老人施設の皆様に深謝申し上げます。